

「平和の俳句 26」

2017年02月01日

「東京新聞」の「平和の俳句」の1月掲載から。福島原発に関する句が多い。被災者は終わらない苦悩を強いられている。また、原爆も同じ問題である。

「住めずとも秋草刈るや仮帰宅 浅田正文（75歳）」<金子兜太 福島からの避難者。一時帰宅の都度、哀（かな）しみの草を刈る。核と人類は共存できない。> 「原発と隣り合はせに住む平和 安藤勝志（74歳）」<金子兜太 安藤さんの知人に、御前崎の原発近くに住む人がいる由。関東平野は福島原発に近く、事故時は被ばくの恐れがあった。実に危険な平和？だ。> 「原発をつくも神へと人の冬 進藤ユミコ（68歳）」<いとうせいこう つくも神とは日本古来、人が使い続けた道具に魂が宿ったもの。荒ぶればわざわいをもたらす。機嫌がよければよい神。今はどっち？> 「福島をわが事として五年過ぐ 山本幹也（62歳）」<いとうせいこう 忘れてはならない災害、事故。五年過ぎても収束しない悲劇。> 上記の句は淡々と詠っているが、そこには深い悲しみと怒りがある。

私は福島を二度、訪ねた。最初は、友人の牧師に岩手、宮城、福島を2泊3日で案内してもらった。津波によって、全てが流された海岸線で、被害の大きさに言葉を失った。大川小学校の子どもと教師の命を飲み込んだ悲劇が心に深く残った。原発事故現場から20kmの所で、進入しないように警察が厳しく規制していた。二度目は、日本基督教団の「みんなの伝道協議会」に参加し、福島を訪ねた。飯館村は美しい農村であるが、放射能線量が高いため、人が入らないように村はずれで規制していた。住み続けている人と避難した人に二分した村である。少し離れた浪江町は線量が高く、住宅や学校の建物はあるが、無人のゴーストタウンであった。ところが駅前に、完備された大きな道路ができていた。帰郷させるために作ったとのことであった。自主避難者への支援を打ち切る政策を取るらしい。政府・東電はオリンピック・パラリンピック前に帰郷させ、原発事故は収束したように見せたいようだ。3・11から6年目を迎えようとしているが、200人近い自死者を出し、被災者の孤独と不安の大きさは計り知れない。苦悩を負わされた被災者の心と生活を支えることが真の復興である。彼らに寄り添う者でありたい。そして何より、大切なことは原発廃止に向かって世論を高めることある。

「原爆の怖さを知った15歳 野林夕夏（ゆうか）（15歳）」<いとうせいこう 広島で話を聞き、ドームを見、自分で考え、素直に句にした中学生。> <金子兜太> 広島で語り部から話を聞いたのだろう。驚きと恐れを率直に描いた。> 私も子どもの頃、広島で被爆の惨状を伝えた新聞を読んで戦慄した記憶がある。オバマ米前大統領が広島に来て、原爆資料館に入ったが、トイレ時間くらいであった。世界の指導者に、広島に来て、被爆の実態を知って、原爆は使用してはならない兵器であることを確認してもらいたい。また、原発は人間が処理できないものであることを認識してもらいたい。台湾は脱原発に舵を切った。「アッパレ」である。

楽しい句を二句。「初夢や世界が武器を捨てた夢 平野旭（あきら）（71歳）」<金子兜太 作者は彫刻家。世界が武器を捨てた夢とは豪快な彫りだ。あちこちに武器にこだわり、執着している連中が多いとき、見事なり。> 「未来とは手あかのつかぬ平和論 伊藤敦（65歳）」<いとうせいこう いつも新しく思考され志向される平和論でなければ、手あかがついた途端、その大切さが伝えにくくなるから。さて未来に向かいます。> 未来は手垢のついていない白紙である。その未来をどのように描くかは、今を生きる人間の英知にかかっている。軍事同盟は敵国を想定したもので、平和を作り出さない。武器を捨て、同盟関係を解消する夢を追いかける。愛と平和の夢を追うのが人間である証しではないか。